

樋口一葉『たけくらべ』論

——哀しみの共鳴——

塚本章子

はじめに

『たけくらべ』は樋口一葉の代表作であり、これまでに多くの研究が積み重ねられてきた。佐多稲子氏の美登利初店説が『たけくらべ』の読み換えを迫るものとして大論争を巻き起こした事が物語るように、『たけくらべ』は美登利を中心に読み解かれることが多い。

その一方で、信如を美登利以上の主人公とする指摘は村松定孝氏や関良一氏によって早くからされていた。また近年の信如を中心に掘えた論には、小森陽一氏や山田有策氏のものをおげることができ。だがこれまで描かれてきた信如像は、大略すれば「非吉原的な（略）精神の高貴さをそなえた」とか、「不変のまま」などと規定されること
がほとんどである。

小森氏は、信如は「たった一人、迫りくる『貨幣』の論理に抗いつづけていた」といい、それは「大人たちばかりか周囲の子どもたちまでが失っていく『口惜しさ』と『恥しさ』を身いっぱい背負い、守りぬこうとしていたから」であるという。そして、「信如とは、全ての

者が売り手と買い手に分節化されてしまうイチとしてのマチに住む子どもたちの、『口惜しさ』と『恥しさ』をわずかに残している負の吸引力を持つ場だったのだろう」と論じた。それは卓越した論であった。だが、これもまた信如を聖なる不変のという枠の中で見るが故に、長吉に喧嘩の加勢を頼まれたとき、「小鍛冶の小刀」を握りしめ「何いざと言へば田中の正太郎位小指の先さ」と、凶暴ささえ感じさせられる意外な信如の姿を、「『たけくらべ』の子どもたちが、すでに奪われてしまった『遊び』の時空、〈聖↓俗↑遊〉の時空の境界がいまだはっきりしていた世界」を「喚起」させる信如の「沈黙」の中にいささか強引に位置付けており、処理しきれていない。

果たして信如とは、聖なる不変の存在であったのか。小稿では、信如の加害性を最大の論点としながら、作品全体の構造に目を配りつつ、『たけくらべ』とは、この世に在る限り清くも正しくも見られぬ自己の姿をも引き受けて生きねばならない人間存在の哀しみの共鳴を描いた作品である、という新たな読みを試みる。

大音寺前に流通する金銭は、人々の心を支配しその生き方を制限している。まず、大音寺前という地域の精神的な支柱であるべき龍華寺の和尚夫婦に注目し、さらに登場する大人たちをおつてみよう。

本来ならば町中で最も聖なる存在であるべき僧侶も、この大音寺前では俗に埋没しきっている。信如の父である龍華寺の和尚は「何処までもさばけたる人」で、「手の暇あれば熊手の内職もして見やうといふ気風」の人である。彼は葉茶屋を出して娘に商売をさせるなど、金儲けに奔走している。彼にとって和尚としての勤めは何ほどのものでもなく、彼はそんな自分のありかたを露ほども疑つてみようとはしない。この和尚は精神的な世界に生きることを完全に放棄している。彼が妻を娶ったのも、実は愛情からではなく「経済より割出しての御不憫か、り」であった。

この和尚の妻、つまり信如の母はどこか悲しい。彼女は夫を失い、一人で食べて生きていかねばならないという厳しい現実の中で、「行き処なき身なれば結句よき死場処」と、何となく妥協して和尚と深い仲になっていった。和尚に対して激しい情熱があったわけでも無く、断るほどの誇りもなく押し流されていったのである。そして今は和尚の商売に黙って追従している。だがこの弱々しい生き方は、苛酷な条件の中で食べて生きのびていかねばならない以上、人間が抱えてしまいがちな弱さとしてリアルで生々しくも感じられる。

大音寺前の人々の、精神的な支柱となるべき龍華寺の和尚夫婦がこ

の有様であった。ここでは聖は俗に回収されていた。

美登利の両親は、「あらかし詞をかけたる事も無く」というように美登利を一人の人間としてしつけ教育しようとはしていない。美登利は将来の金づるであり、傷付けてはならない大切な商品であった。娘を廊に売り飛ばす親としての罪悪感はこの両親には微塵もない。美登利が西の日に初潮か初店か分からぬが、女としての何か大きな変化を抑えてふさぎ込んでいても、美登利の母親は「いつでも極りの我がま、様(略) 真実やり切れぬ娘さまではある」と言うだけで、打撃を受けた娘の心に寄り添ってやろうとはしない。この母親は子供を愛する気持ささえも麻痺させられている。

三五郎の父親は、「目上の人に頭をあげた事なく廊内の旦那は言はずとも、大屋様地主様いづれの御無理も御尤と受ける質」という、奴隷根性に犯されてしまった人物である。彼は完全にプライドも意地も失い、金銭の前で骨抜きになってしまっている。万年町という貧民窟に住み、多くの子供を抱えて困窮している彼の姿は、作品に見られる大人たちの中でも最も重く病んだ姿として映るのである。

さらに往来に視線を向けてみれば、祭りの日に女房たちは「大方臨終は金と情死なざるやら」と正太郎の祖母の陰口をたたきながら、「夫れでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さりとは欲しや」などとささやいている。陰口をたたかせるのが欲望なら、「門前の花屋が口悪囀も兎角の蔭口言はぬを見れば、着ふるしの浴衣、総菜のお残りなどおのずからの御恩も蒙るなるべし」と、それを封じるのもまた欲望である。

つまり大音寺前という世界は、人間同士の暖かい繋がりがりや潔白さや

正義感を失った人々の生きる殺伐とした世界なのである。ここには聖なるものによる精神的な救済はなく、絶対的に君臨しているのは金銭であり、その支配の象徴として大鳥大明神をまつる霜月の酉の日があった。

子供たちもまた、その支配によって束縛され虐げられていた。そして、信如を通して明らかになっていくことであるが、この作品にあるのはその巨大な金銭の支配を突き崩そうとする激しい闘志ではなく、そうはなしえぬ虚しさである。このことは逆に、時の流れに流され、とうてい動かしがたい現実の前で妥協していく以外には生きるすべのない、一人一人の人間の在り方を深く見つめさせることになっていった。そしてこれこそが、『たけくらべ』の抒情性につながるものであり、またこの時期の一葉文学の核心を語るものではなかっただろうか。

二

子供たちの姿が躍動的に描かれるこの作品に、死という言葉は一見似つかわしくない。だがこの作品には、季節という悠久の時の流れの中に、死への暗い引力と生への虚無感が漂っていることがあらわになる箇所がある。祭りが終わり秋の気配が感じられる第十章の後半部で、語り手があと子供たちから視線をそらし、大音寺前界限全体を見渡すような巨視的な描写をする箇所がそうである。

春は桜の賑ひよりかけて、なき玉菊が灯籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶ事此通りのみにて七十五輛と数へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に乱るれば横堀に

鶉なく頃も近づきぬ、

大音寺前の季節のうつろいを大きくたどって見せるこの描写が、作品世界の底流に季節という永久に循環する時間の流れがあることを顕著に感じさせる。

秋風とともに感じられる「臼の音」の「さびし」さや、「角海老が時計の響き」の「哀れ」さは、「日暮里の火の光も彼れが人を焼く煙りかとうら悲しく」と続くように、人の命のはかなさや淋しさにつながっている。「四季絶間な」く燃え続ける日暮里の死体を焼く火は、誰もが生きている限りいつかは迎えねばならない死を予感させ、絶対に逃れられぬものとして直視させるのである。大音寺前界限の人々はこの火の生を終えると皆その火の中へ順々に送り込まれていく。その火は決して消えることなく燃え続ける。全ての者は死んでいくという認識は、ここでは生をも虚しいものに感じさせているように見える。「二十ばかりなる娘」の入水の悲劇も町の新しい噂の一つを越えるものではなく、「大工の太吉」が花札賭博で捕まったところで、「取立て、噂をする者も」ない。全ては時間と溶け合い、流され消えてゆくものである。

四季は、繰り返して繰り返して絶える事なく巡り続ける。毎年夏祭りは行われ西の市もひらかれるだろう。そして生命は途絶える事なく生まれ続け、遊んでいる子供たちの姿はいつもどこかにあるだろう。だがその顔ぶれは次々に入れ替わっていく。美登利や信如やといった個々の人間にとっては、時間は決して循環することのない後戻りもできぬ流れである。ある年頃を迎えた者たちにとって、ひとときの夏から冬へという推移は、大人になるといふことがいかなることか次第に見定

めていく時間であった。そのことをはつきりと見定めた時、孤独な厳しい冬の日々が彼らの行く手にはっきりと待ち受けているのである。次の夏祭りが再びめぐって来たとしても、その中心となるのは、あるいは長吉の「末弟の奴と正太郎組の短小野郎」たちといった次の世代の子供たちであり、冬にはまた誰かが悲しみの中で子供の日に別れを告げて行くだろう。

『たけくらべ』という作品は、めぐり続ける悠久の時の流れの中で、死の世界を底部に暗示しながら、有為転変してゆく生の世界のひとこまをとらえようとしているのである。

三

子供たちもまた、金銭の支配に組み込まれ生き方を制限されていた。最初に美登利を、次いで正太郎と三五郎について見ていこう。

子供たちの間で金銭をばらまき続ける美登利は、「子供中間の女王様」であった。一見最も自由に金銭を操っているように見える美登利は、すでに遊女として売り渡された最も金銭に縛られた存在である。両親の手で将来を売り渡された美登利は、実質的には孤児といってもよかつた。だが我が物顔に町を闊歩する美登利はまだ、遊女にならねばならぬ屈辱と孤独に気付いていなかった。

夏祭りの日、長吉は「何を女郎め頼桁た、く、姉の跡つぎの乞食め」と美登利を罵倒し、泥草履を投げつける。それは美登利が初めて受けた屈辱であり、自分が人々から本当はどのように見られる存在なのか暗示された瞬間であった。美登利がいくら「此処は私が遊び処」と女

王気取りに振る舞って見せても、そのような自分の姿は幻影にすぎない。美登利はこの時、「乞食」としてしか見られない汚れた自分の姿に、一瞬思いがけず向き合わされたのである。

この時の美登利の悔しさは、「此方には龍華寺の藤本がついて居るぞ」という長吉の一言によって、以前からかたくなに美登利を避け続けていた信如に向けられていく。躍起になって「龍華寺は何ほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり」と反発しながらも、女郎という存在のけがれをどこかに感じ取ってしまった美登利は、自分にはない潔白さを信如に感じてひかれていった。

時雨の降る朝、大黒屋の格子門の前で鼻緒を切つて難儀している信如に、美登利は紅入り友禪のきれを投げかける。しかし、二人の間には「何うでも明けられぬ門」が立ちほだかつていた。それは美登利を決して自由には生きさせぬ、金銭がどこまでも支配する社会の現実そのものの象徴ではなかつたか。「物いはず投げ出」された紅入り友禪は、暗い宿命から救い出されることを求める美登利の痛切なメッセージでもあった。だが美登利の慕う潔白なはずの信如は、遊女になっていく宿命にあるけがれた美登利に振り向き彼女を救い出してはくれなかつた。紅入り友禪は信如に拾い上げられる事なく、雨の中で「可憐しき姿を空しく格子門の外にと止め」るばかりであった。美登利に神は現れなかつたのである。

変化は突然訪れた。最後の酉の日に、美登利は嶋田に結って吉原から出てくる。美登利に何が起こったかは大きな論争を巻き起こしてきるところであるが、初潮にしても初店にしても美登利が自分の人生が

いかなるものか思い知ったことは確かであろう。

憂く恥かしく、つ、まじき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、嶋田の鬢のなつかしさに振かへり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと察られて、

成事ならば薄暗き部屋のうちに誰れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人気ま、の朝夕を経たや、さらば此様の憂き事ありとも人目つ、まじからずは斯く迄物は思ふまじ、

美登利は、夏祭りの夜に垣間見た、人々の視線の中の「乞食」呼ばわりされるよごれた自分の姿を今やはっきりと意識する。自分自身の心がけや努力だけではどうにも変えられない醜い自分の姿を、美登利は引き受けていかねばならない。「何故このやうに年をば取る」とどんなに嘆いても、美登利はもう二度と子供に戻ることは出来ない。時間には情け容赦なく美登利を大人の世界へと押し流していく。そしてそこに待ち構えているのは、永遠に続くかのような厳しく孤独な冬の日々である。

ある箱の朝、大黒屋の格子門に一輪の水仙の作り花が差し込まれていた。この水仙が美登利の目に「淋しく清き姿」と映るのは、美登利の、両親によって吉原に売られ誰にも救つてはもらえない「淋し」と、「清」さに憧れながらも自分は所詮そうは生きえない悲しみのゆえである。この水仙については、後に詳しく論じることになろう。

正太郎はよく歌をくちずさみ、威勢がよく、仲間たちの中心的存在だった。子どもたちだけでなく大人たちも、彼の素直な明るさに引かれていた。だが正太郎は、三つのとき母を失い父に見捨てられた寂し

さを美登利の前でだけ吐露する。彼もまた家族の暖かさを保証されることなく、何故にかこの世に生み出されてきた。そして金銭が全てを支配する厳しい現実を生き抜いていかねばならない。

年寄り一人と孫一人の生活。近い将来祖母は死に逝き正太郎は一人残されるだろう。古い先短い年寄りが孫の将来を案じ、「昔しの通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみに」し金貸しを続けることを、ただ悪だと言いつけてしまえばしない。だがそれは貧しい人々への大いなる加害であった。

集金に行くうちでも通新町や何かに随分可愛想なのが有るから、嘸お祖母さんを悪るくいふだらう、夫れを考へると己れは涙がこぼれる、矢張り気が弱いのだね、今朝も三公の家へ取りに行つたら、奴め身体が痛い癖に親父に知らずまいとして働いて居た、夫れを見たら己れは口が利けなかつた、

この社会の中で食べて生き抜いてゆくこととは、貧しい人々や友さへも踏み倒し、人から「悪るくい」われねばならぬ苛酷な生存競争であった。金銭の前で人間とは無慈悲な存在でしかあり得ず、人間は金銭を離れては生きられない。正太郎はそのどうしようもない悲しみに涙するのである。

美登利が酉の日に突然子供の世界を去った時、正太郎もまた子供の日々に別れを告げ、厳しい冬の日々へと突き出されていく。

表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な／＼の弓張提灯、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影ぞ、ろ寒げに、折ふし供する三五郎の声のみ何時に変わらず滑稽では聞えぬ。

正太郎はこれから先、自分が加害者として見られる事を全面的に引き受けながら「冬の月夜」を歩き続けていかねばならない。そばで三五郎がどんなにおどけても、もう正太郎は以前の陽気な姿に戻ることはない。それはひっそりと孤独な姿として描かれている。

三五郎は子供たちの中で最も引き裂かれた存在である。

田中屋は我が命の綱、親子が蒙む御恩すくならず、(略)三

公己れが町へ遊びに來いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地処は龍華寺のもの、家主は長吉が親なれば、表むき彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまる、時の役廻りつらし。

三五郎は、彼の貧しい一家が生き延びていくために、正太郎にも長吉にも背いてはならないという難しい立場に立たされていた。小森陽一氏^③が指摘するように、彼は「去年一昨年とさかのぼ」って仁和賀をさらうことができるほど記憶力に優れた少年なのかもしれないが、自分を滑稽者にしてしまおうとする。「三五郎といへば滑稽者と承知して憎くむ者の無きも一徳なりし」とあるように、人々の視線を滑稽さでかわすことが、正太郎と長吉との対立の間で生き抜いていかねばならない彼なりの保身の術であったのだろう。「美登利と正太が鬨りものに成つて、お前は性根を何処へ置いて来たとかからかはれ」、苦笑によって許されつつ彼は生き延びていく。

だが三五郎は、誰にも本当の友達として認められてはいない。酉の日美登利の変貌にいらつく正太郎に、三五郎は「二銭貰ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人中間に有たとて少とも嬉しい事は無い、着きたい方へ何処へでも着きねへ」という冷たい言葉をあび

せられる。わずかな金銭のために三五郎は常に、どこかに冷たい侮蔑をはらんだ視線によってしかとらえられていない。

正太郎にそんな言葉をあびせられてもなお、三五郎は日かげの集めにまわる正太郎に付き従う。「折ふし供する三五郎の声のみ何時に変わらず滑稽では聞えぬ」。ここには、いつもと変わらぬわびしい三五郎の姿がある。彼は一足早く冬の日々を生きていた。

美登利や正太郎や三五郎はみな孤独で、金銭によって生き方を制限され、社会の中では決して清くも正しくも見られない自分の姿を引き受けて生きていかざるをえないのである。

四

このような子供たちの中にあつて、信如は同じように寂しさをかみしめつつ、ただ一人汚れなき存在であろうと反発し続けていた。他の子供たちが信如にどこか心引かれていたのは、おそらくそのためであつた。

信如は深く思い悩む少年であつた。それは、僧侶という職業にありながら金儲けにはしり蒲焼を食らうような「何処までもさげた」父親と、黙って追従する家族に対する強い反発がひとつの原因であつた。

性来おとなしき上に我が言ふ事の用ひられねば兎角に物のおもしろからず、父が仕業も、母の所作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれど言ふて聞かれぬものぞと諦めればうら悲しきやうに情けなく、友朋輩は変屈者の意地わると目ざせども自ら沈み居る心の底の弱き事、

信如は、聖職者であるべき者が、どこまでも現実的に生きようとすることを許容することができなかったのである。

なぜ信如は、そこまで潔癖な意識を持ち、父親に反発せねばならなかったのだろうか。その理由を探るために、いま一度父親に感じる反発が描かれた箇所を振り返ってみよう。

さかなは好物の蒲焼を表町のむさし屋へあらい処をとの誂へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、其嫌やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの筆やに子供づれの声を聞けば我が事を訝らる、かと情なく、そしらぬ顔に鱈屋の門を過ぎては四辺に人目の隙をうかゞひ、立ち戻つて駆け入る時の心地、我身限つて腥きものは食べまじと思ひぬ。

信如は斯かる事どもいかにも心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近辺の人々が思わく、子供仲間の噂にも龍華寺では簪の店を出して、信さんが母さんの狂気面して売つて居たなどと言はれもするやと恥かしく、其様な事はよしにしたが宜う御座りませうと止めし事もありしが、

信如の恥じらいは事柄の善悪自体のみではなく、それが人々に見られるというのをひどく意識するところからも生まれている事に注目したい。同じことは「他処の人は祖母さんを客だと言ふ」とか、「嘘お祖母さんを悪るくいふだらう」とか、嘆いていた正太郎にも伺える。正太郎もまた人々の視線を意識して苦しんでいる。この二人に共通するのは学問ができることである。『たけくらべ』では、学校制度や学問への関心が子供たちを少なからず規制している。信如や正太郎が他

の子供たちから一目置かれていたのは、学問ができるからでもあった。この学業優秀な少年たちは、社会から見られる自己を意識し、親たちが利欲にはしることを恥じている。それは、修身教育を重視していた当時の学校制度によって培われた清廉潔白な価値観のためであったと考えられる⁽¹⁾。しかし彼らの父親や祖母は、そのような意識から遠く金儲けにはしっている。彼らは二つの価値観の間で板ばさみとなり内向していくのである。信如のほうは権威としての父親への反発へ、正太郎のほうは老いた祖母をかばう思いから自責へと向かう。

父親への批判を突き詰めていけば、やがて信如は自分が意識する人々の視線の中に恐ろしいものを見なければならぬだろう。それは、信如の意識と共通するところのある以下の語り手の視線の中に明かされる。

如是我聞、仏説阿弥陀経、声は松風に和して心のちりも吹払はるべき御寺様の庫裏より生魚あぶる烟なびきて、卵塔場に嬰子の襦袢ほしたるなど、お宗旨によりて構ひなき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そゝろに腥く覚ゆるぞかし、

「卵塔場に嬰子の襦袢ほしたる」とは、お花と信如の生まれたことを指しているに他ならない。僧侶のあからさまな欲望に批判的な者から見れば、信如は存在してはならぬ者なのである。ことに和尚夫婦の結婚は慎ましいものとは言いがたかった。信如は自分の存在を否定することもできるであろう人々の視線におびえ、萎縮せざるをえない。信如は「部屋にとじ籠つて」息をひそめるように生きている。その「臆病」な果てしない弱々しさの原因には、父親の俗物性を否定すればするほど自己の存在の是非自体と向き合ってしまうというジレンマが根底に

あった。

信如は自分を、けがれなき人間であらしめようとしていた。聖なることよって信如は、弱々しいながらも俗なる大音寺前の金銭の支配を突き崩す可能性を秘めた唯一の存在であり得ていたといつてよい。

五

しかし、信如はけがれなき人間であろうとすることに挫折していくのではなかっただろうか。それは、信如の美登利への感情の変化を分析していく中から浮かび上がってくる。

大和尚の奔放な欲情に対する嫌悪感からか、それとも自分が生まれできたことへの懷疑からか、信如は金銭や食欲のけがれだけではなく色恋からも遠ざかろうとしていた。

大方美登利さんは藤本の女房になるのであらう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど、取沙汰しける、信如元来かゝる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、夫れよりは美登利といふ名を聞くことに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もやくやくして、何とも言はれぬ厭やな気持なり、

ここには、少年にありがちな異性への照れ臭さと言うだけではすまされぬものがある。「かゝる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く」というのは、信如のあまりにも敏感な性への拒絶を感じさせるのである。

そのような信如にとって、美登利が自分の女房になるのだろうか

されることは「恐ろしい」事だったのである。美登利は「廓ことばを町に」言い、いつの間にか女郎の振る舞いを身に付けてしまっていた。そして、美登利自身はそれほどの意識はなかったとしても、「藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ」たり、「おくれし信如を待合して」花を折ってもらおうとする美登利の姿は、信如には男性に媚を売るような態度に感じられたらう。信如の目には、美登利は吉原やその周囲にあふれる乱れた色香をまとう者として写っていたのではなかったか。

しかし信如の気持ちは美登利に一輪の水仙の作り花を残すまでに変化していく。そのきっかけは何だったのか。美登利の信如への思いがかきたてられていくのは夏祭りの日の喧嘩が契機であるが、信如の變化もやはりこの喧嘩を契機にしていたのではないか。この事件の表面的な中心人物は長吉であるが、「信如の尻おし無くは彼れほどに思ひ切りて表町をば暴し得じ」と美登利が言い当てているように、事の本質に深く関与してくるのはむしろ信如である。では信如にとってこの喧嘩はどういう意味あいを持っていたのだろうか。

長吉が信如を部屋に訪ね、今度の祭りの喧嘩では味方についてくれるように頼み込んだとき、しぶしぶ承知した信如の内心は次のようなものであった。

長吉は我が門前に産声を揚げしものと大和尚夫婦が鼎原もあり、同じ学校へかよへば私立私立とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき愁れさ、先方は町内の若衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取る事罪は田中屋がたに少なからず、見かけて頼まれし義理としても

嫌やとは言ひかねて

信如には長吉に味方する地縁的な立場や感情もあったのだが、それを正当化していったのは「罪は田中屋がたに少なからず」という公平な判断であった。それは先に述べてきたような信如の潔白な在り方に通じるものである。しかしこの場面では、信如はふと意外な表情を見せる。長吉が信如に求めたのは「何も為らないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへ呉れる」ことであり、「向ふの奴が漢語か何かで冷語でも言つたら、此方も漢語で仕かへして」くれることであつた。だが信如は、「何いざと言へば田中の正太郎位小指の先さと、我が力無いは忘れて」、「机の引出しから京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見」せるのである。ちらりと垣間見せられたこの信如の姿は、作中の信如の描写の中で最も生々しい印象を与えるものである。思うような生き方を得られず、友人や両親の間で萎縮するばかりの弱い被害者にみえる信如という存在の中にも、暴力的な加害者としての可能性が潜在していることをこの姿は物語っている。この姿は、即座に「あぶなし此物を振り廻してなる事か」という言葉によって閉じ込められる。「振り廻させて」ではなく「振り廻して」とされたのは、この言葉が信如自身のか信如の意識に限り無く近付いた語り手の言葉であることを示すだろう。信如は潔白に生きようとして、自分の素顔を注意深く隠蔽しようとしていたのかもしれない。しかしいくら注意を払い内部から生まれる加害性を抹殺しようとする自分を厳しく統御してもなお、自己の責任を越えたところで加害者となることを避けられないこともあるというどうしようもない現実を、信如は祭りの日に思い知らされるのではなかつたか。

夏祭りの喧嘩は、長吉たちが運悪く正太郎がいない時に筆やにのりこみ三五郎と美登利を痛めつけただけという卑怯なものに終わってしまふ。そして「此方には龍華寺の藤本がついて居るぞ」という長吉の一言によって、信如はこの卑怯な喧嘩を背後で操つたものとなつてしまったのである。それは、信如が長吉の仲間になることを承知したときの公平な判断を裏切るものであつた。翌日になつて様子を知らされた信如は、「我が為したる事ならねど人々への気の毒を身一つに背負たるやうの思ひ」を感じる。実際は名前を借りられただけであつても、信如は今、自分がまぎれもなく罪なき美登利や三五郎への加害者となつてしまったことを知らされたのである。信如は自分では潔白で公平であつたつもりでも、人々との関係や揺れ動く状況の中では常にそうあるとは限らないことを、そして他人の目に写る汚れた自分の姿もやはり自分自身の一部としてあることを知つてしまったのである。自分の中の、小刀を振り回そうとしてしまうような加害の衝動を押し殺し、どんなに自己を抑制したところで、潔白に公平に生きることなど不可能であつた。

その時から信如の目には、泥草履を額にぶつけられ「何を女郎め頼桁た、く、姉の跡つぎの乞食め」と罵られた美登利は、もう以前のように乱れた色香をまとう者とは写らなかつただろう。美登利とて何故かこの世に生まれねばならず、自己の責任を越えたところで決定されてしまった人に蔑まれる女郎への道を、ただ辿らされていく以外には生きる道のない者に他ならなかつた。信如にとつて、美登利は自己と共鳴し合う、自分が償うべきかもしれない者へと変わろうとしていたのではなかつただろうか。それは異性への恋心というだけではなく、

この世の中で生きる限りどのようにしたところで清くも正しくもあり得ぬ人間の存在の哀しみの共鳴といったものではなかったか。

時雨の日大黒屋の前で鼻緒を切ってしまった信如は、格子門のむこうから美登利に「紅入り友仙」の「裂れ」を投げかけられる。だが信如はそれをなかなか拾い上げられない。美登利は吉原とそこに寄生している大音寺前という社会の論理を背負っていた。女に生まれ、美しい遊女になるべく育てられ、吉原へ送り届けられ、それが吉原の繁栄と大音寺前に生きる者たちの経済的な拠り所となるのである。美登利が信如を慕う思いを受け入れることは、彼女の背負う社会の論理そのものとの対決を余儀なくされていくことであった。信如は両親との葛藤の中でそれがどれほど困難なことか知っていただろう。そして信如は、もはや美登利の憧れるような潔白なだけの存在であることはできなかった。信如は一旦は友禪に「心残りして見返」るが、やはりそれは拾われる運命にない。「廓内よりの婦り」と見える、吉原と大音寺前の論理を体現しやがて美登利の行く末に待ち構えている客の一人であらう長吉が阻止してしまう。信如は無力であった。ただ、この「可憐しき姿を空しく格子門の外に止め」た友仙の姿は、美登利の一生の哀しみを訴えるものとして信如の心の中に深く焼き付けられたはずである。だからこそ信如は、去り行く前に再びその門の前に立つのである。

この後、信如は読者の前に直接姿を見せることはない。美登利が急に変貌する酉の日に、三五郎の口から「信さんは最う近々何処かの坊さん学校へ這入るのだ」と正太に知らされる。正太は「藤本は来年学校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其様に早く成つたら

う」と不思議がる。この予定より早められた出発は何を暗示するのだろうか。夏祭りの喧嘩によって予想外の自分の在り方を見てしまったことは、信如にとって大人の世界への苦い一歩であったのかもしれない。人間が生きて在ることとは、決して正しくはないことも併せ持つてしまうことでしかないという事を知ったのなら、いつか信如は父親の生き方さえも一方的に批判することはできなくなっていくだろう。校内一の優等生信如の学校中退、それは先に述べたようにその制度の中で得てきた信如の価値観の挫折^③を物語る。信如もまた、親の定めた道を歩み始め、大音寺前から消え去ってゆく。信如は子供たちの救いにはなれなかったのである。将来、龍華寺を継ぐために「坊さん学校」から戻ってくる信如の姿が、父親和尚の姿と異なるといふ保証はどこにもない。そしてそこには、成人した美登利や正太郎や三五郎によって練り広げられる、やはり変わらぬ殺伐とした大人たちの世界があるだろう。

六

美登利の家のあの格子門に、ある霜の朝一輪の水仙の作り花が差し込まれる。この格子門の向うから美登利が信如に投げた紅入り友禪の鮮明な印象がある以上、この水仙の送り主として信如以上にふさわしい登場人物はいない。そしてまた、「其明けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日なりしとぞ」という表現からも、私たちは格子門の前に立つ信如の姿を思い浮かべるのである。信如にできるのは、一輪の水仙の作り花を差し入れておくことだけであった。信如は

望みどおりの幸福を与えられることなどない世の中に、自ら願ったわけでもないのに生み出されてこなければならなかった。そして生きるということは、結果として正しくはないことをしてしまっている自分を引き受けざるを得ず、人々の視線の中で醜くもある救われぬ自分を併せ持たねばならないことであつた。信如が差し入れた一輪の水仙には、そのような「淋し」さと、「清」さに憧れつつもそうは生きられぬ哀しみが込められていた⁽¹⁾。それは美登利の抱える哀しみとの共鳴であつた。さらにまた、送り主が曖昧に描かれた事によつてこの水仙は、信如から美登利へという制限を越えて、正太郎や三五郎も含めた全ての子供たちの抱える哀しみとの共鳴にもなつた。

水仙は別の名を雪中花とも言い、その名の通り一年で最も寒い積雪の頃に花を咲かせる。風雪に耐えて咲くその花は、厳しい冬の日々の中で人々の慰めとなる花だといえる。同じ哀しみを共に分け持つことがせめてもの慰めとなりうるなら、この花は確かに、冬を迎えゆく子供たちへの慰めの花であつた。

そしてこの水仙は、「作り花」すなわち造花であつた⁽²⁾。造花とは、生命とは無縁のものである。時間の中で成長することとも生まれ死んでゆかねばならないことも無関係である。命在るものは時の流れの中で大人になっていくことを拒むことはできない。大人になるということは、職業に就き金銭を得て食べていくことを自分だけの責任として背負うことである。その厳しさの前では、自分自身がけがれた者としてあることや、加害者としてあることの哀しみはただ押し殺してゆくしかない。子供たちは今まさはっきりとそれを引き受けていこうとしている。やがて彼らは、彼らの親たちのようにふてぶてしいまで

にしたたかな大人になっていくかもしれない。だが今はまだ彼らは哀しみのうちにある。水仙が造花であつたのは、流れ続ける時間の非常さへの悲痛な、しかし所詮は虚しいばかりの抗議であり、生への苦い諦観であつた。

『たけくらべ』という題名は、丈を比べ合う、つまり美登利や正太郎のように大人になることを待ち望み成長を競い合う子供たちの姿をとらえた言葉であろう。しかし彼らの夢はやがて失望へと変わらざるを得ない。この言葉の背後には成長せねばならぬ生命の宿命への深い哀しみがあわく漂っているのである。

『たけくらべ』とは、人間存在の哀しみの共鳴を、金銭によつて縛られた救いのない現実の中に、底部に死の世界を暗示しながら、巡り続ける季節という悠久の時を背景に描き出した作品である。

注

(1) 佐多稲子「『たけくらべ』解釈へのひとつの疑問」(『群像』一九八五年五月)

(2) 村松定孝『評伝 樋口一葉』(実業之日本社 一九六七年二月)

(3) 関良一「『たけくらべ』の世界」(『樋口一葉 考証と試論』有精堂 一九七四年九月)

(4) (8) (10) 小森陽一「樋口一葉『たけくらべ』」(『国文学』一九八五年一〇月)

(5) (7) 山田有策「『たけくらべ』論」(『国文学 解釈と鑑賞』一九八六年三月)

(6) 関良一「『たけくらべ』人名考」(同前)

(9) 「たけくらべ」脚注(『全集 樋口一葉』第二巻 小学館 一九七九年一〇月) 参照。

(11) 教育勅語の前ぶれとして位置づけられる『幼学綱要』(明治一五年)には、儉素、勉職という徳目があげられている。また西村茂樹『小学修身訓』(明治一三年) 生業の項に『西国立志編』から「徒ニ金銭ヲ蓄積スルハ。其心褊小ニシテ。其所行ヲ吞齋ト名ケテ賤シムベキコトナリ。」と引用されており、このような価値観が彼らに影響していたといえる。また同書交際の項には『西洋品行論』から「(略) 人民ノ性質此ノ如クナレバ。其国爛然トシテ光采アリ。他国ヨリ仰望シテ尊敬セラルベシ。(略)」と引用されている。個人を国家の構成員として位置付ける視点を与えられたことよって彼らは社会の人々からまなざされる自分を意識するようになったのであろう。また『幼学綱要』には廉潔、公平といった徳目もあがっている。こういったことも彼らに影響を及ぼしているらしいことを言い添えておく。

(12) 西川祐子氏は「性別のあるテキスト―一葉と読者―」(『文学』一九八八年七月)で、「信如は家族の全員と、宗旨には反さないとはいえ僧にあつてはいけない子として生まれた自分自身を恥じてうつむいて歩いている。」と指摘している。

(13) 信如を加害者とする論に高良留美子「無意識の加害者たち―『たけくらべ』論」(『樋口一葉を読みなおす』新・フェミニズム

批評の会編 學藝書林 一九九四年六月)がある。しかし小稿は「美登利をとりまく男たちは(略)すべて彼女への無意識の加害者」であるとすする氏の読みとは異なる。

(14) 田上貞一郎氏は、「『たけくらべ』注釈考(一)」(『佐古純一郎教授退任記念論文集』一九九〇年一月)で、「これが本当に作者の思わすもらした感想であるなら『此物を振り廻してなる事か』と自動詞を採用せず、『振り廻させて』したはずである」と指摘し、信如の心中思惟または信如の会話のいずれかと判断している。

(15) 滝藤満義氏は「『たけくらべ』」(『国文学 解釈と鑑賞』一九九五年六月)で、「学歴という物差し」が「親とは違う職業を選ぶことを可能にした」という点から、ここでの学校教育の無力を指摘している。

(16) 一葉は「道德すたれて人情かみの如くうすく朝野の人士私利をこれ事として国是の道を講ずるものなく世はいかさまにならんとすらん(略) わがこゝろざしは国家の大本にあり」(『塵中につ記』明治二十七年三月)とも書く人物であった。修身教育とはいってもここで忠君愛国や天皇制を前面に出すのは適切ではない。小稿ではむしろ、前近代的な価値観を引きずり「道德すたれて」と嘆く一葉は学校制度の中で徳育が重視されてきたことにあるいは期待を寄せていたかもしれないが、しかし一葉が現実の金銭の支配の中でそのようなきれいな虚偽性を見定めていたところに卓越した眼力があつたとみる。そこに一葉の意識しなかつたことであろうが、「天皇制の呪縛力と対峙する文学表現の可能性のひ

とつ」(高田知波「へ女・子ども」の視座から―『たけくらべ』を素材として―『日本文学』一九八九年三月)を見ることもあながち不可能ではない。

(17) 滝藤満義氏(同前)は、「水仙の作り花」の「淋しい姿」に着目しこの水仙は「送り手の信如の淋しさ」と、受け手の美登利の淋しさをも象徴して「おり、更に「『たけくらべ』に登場する少女少女達すべての淋しさの象徴でもあった」と指摘する。小稿は水仙の解釈において結果としてこの指摘を敷衍させたものとなった。

(18) 水仙が造花である理由については解釈が分散している。管見の限りであれば、美登利が「遊女という『作り花』にされ」て一生を送らねばならない現実に対する「一葉の抵抗」を見る三宮慎介氏(「『作り花』考―『たけくらべ』に関する冒険的試論―」『高知女子大学紀要』一九七九年三月)、遊女となっていく後の美登利自身の姿を見る河合貞澄氏(「『たけくらべ』小考」『愛媛国文研究』一九八六年二月)や渡辺桂子氏(「水仙への序曲―『たけくらべ』試論―」『昭和学院国語国文』一九八八年三月)、
「少女美登利の面影が凍結される」とする出原隆俊氏(「『たけくらべ』の成立基盤」『国語国文』一九九一年二月)、
「そこである時間をストップさせてしまうという作者の意図」(「共同討議樋口一葉の作品を読む」『国文学』一九八四年一〇月)、「信如を内的に変化させないまま、『水仙の造り花』に化せしめた」(「『たけくらべ』論」『国文学 解釈と鑑賞』一九八六年三月)「純粹で無垢で変わらない子供という永遠性、あるいは不朽性が造花

にこめられているといってよく」(「シンポジウム『たけくらべ』をめぐる」『国文学 解釈と鑑賞』一九八八年二月)と、複数の説を残すのは山田有策氏である。

* 『たけくらべ』の引用は、筑摩書房版『樋口一葉全集』第一巻(一九七四年三月)による。但し、漢字は新字体に改め、ルビは省いた。

(つかもと あきこ)